NPO 法人
ベーシックライフインフォメーション協会
会報第8号

文化講演会開く、満席で好評

さる九月七日練馬区立生涯学習センターで文化講演会を開催した。

講演題は「日漢文化の比較」で光田明正氏（長崎外国語大学名誉学長・桜美林大学孔子学院名誉学院長）で「漢文明抜きにしては考えられない日本文化であるが摂取したものをすべて和風化している。日漢文化の同質性、異質性を説く」もので三十人席が満員になった。アンケート回答の提出者十九人全員が「よかった」の評価であった。当日の講演内容は本紙（第八号）を参照願います。質疑応答は割愛しています。

台湾人戦没者慰霊碑で慰霊を実施

本会は十一月三日文化の日に秋の行事である台湾人戦没者慰霊碑を訪問し慰霊をおこなった。

奥多摩湖畔の峰谷橋で下車し赤い鉄橋を渡り山道を登ること三十分で到着。奥多摩は紅葉が盛り景観が素晴らしい。

慰霊碑の周囲を丁寧に清掃し花を活けて、線香をあげた。各々の仕方でお参りし追悼した。

碑文は

「台湾出身戦没者の方々

あなた方がかつてわが国の戦争によって尊いお命をうしなわれたことを深く心にきざみ永久に語りつたえます　どうぞ　安らかに永眠してください」と縦一メートル、横二・二メートルの大理石に刻まれている。昭和五十年台湾出身戦没者慰霊奉仕会が浄財を募って造られたという。

篤志の先人の熱い思いにも感謝した。

この後麦山の浮橋へハイキングを続け秋の一日を過ごした。

慰霊碑全景

ドキュメンタリー映画「空を拓く～建築家・郭茂林という男～」の上映報告

各方面の方々の協力で今年度上映されたのは次の通りです。

八重山台湾親善交流協会
沖縄支部 上映会
　那覇市　琉球新報ホール
　五月二十五日
建築CINEMA映画祭
　鹿児島市　ガーデンズシネマ
　十月十七日～十九日
台湾映画祭２０１４
　福岡市　ユナイテッドシネマ
　　キャナルシティ
　九月十二日～二十一日
長岡アジア映画祭'14最初的一歩
　長岡市　アオーレ長岡
　十一月一日～三日

鹿児島のポスター

講演紙上紹介

「日漢文化の比較」

講師　光田明正氏

はじめに

日中の関係は長く、複雑である。世論調査では、最近は「中国に好感が持てない」という人が多いという。日中関係は、「好きだ」とか「嫌いだ」とかでは処理できない問題である。そのような世論調査をすること自体、事態を表層だけで見ていると言わざるを得ない。日本の歴史は日漢関係史であり、その結果、今の日本文化は、漢文明抜きには成り立ちえない。

今の日本人には、現在の欧米文明を基礎とした国際秩序を唯一の国際関係を図る基準とする傾向が強い。「中国が好きか嫌いか」というような設問をするのは、その延長である。好きだ嫌いだという前に、中国とは何か、日本とは何かをきちんと学び、理解する必要がある。その際に、中国をとらえるのに、現代国家「中華人民共和国」としてとらえるのではなく、「中華文明（漢文明）」として、とらえなくてはならない。その見地から、日漢両者の相似性、異質性を理解する必要がある。

もし本当に現在の多くの日本人が「中国に好感を持てない」とするなら、まずはこの学習をすることが、何より重要である。

1．生い立ちの違い

中国の建国記念日は、10月1日である。毎年、北京はもとより中国各地で盛大な式典が行われる。東京の駐日大使館も大勢の人々を招いて、パーティを行う。今年は、建国65周年である。では中国の歴史はわずか65年か。「中華人民共和国」を「中国」と言い換えれば、今年が65周年である。1949年に成立を宣言した現在の65年の歴史を有する中華人民共和国を語れば中国が分かると言えるか。視点を変え中国大陸に芽生え、発展してきた文明を「中国」と言えば、それは「悠久の中国5千年の歴史」となる。

日本が中国を考察する時、前者、現在目前にある国家あるいは政権を取って考えるか、後者、悠久の漢文明を取って考えるか。両方の視点が必要である。ただしどちらかというと後者が重要である。後者なくしては前者の十全な理解は出来ない。前者の理解だけでは壮大な漢文明全体を把握することは出来ない。漢文明の創造発展の歴史こそ中国であると言える。

王朝の盛衰は漢文明の一側面にしか過ぎない。中国とは数千年前に中原に発祥し、今に続く文明である。その理解が必要である。

日本（大和）の生い立ちはどうであろうか。日本列島にも、早くから独自の自然観、生活の営みを持つ人々が住んでいた。縄文の漢文明とは異質の文化が基底にある。「文明」と言いたいところであるが、全地球的にみると「文明」と称するのには規模が小さく、力強さが十分と言えない。この人々が、対外的に国家を形成し中国大陸の漢文明に独立しまとまった組織として遭遇した時、その漢文明はすでに3千年の発達を経て熟爛の段階に達していた。大和としては、その3千年前の始動の段階、禹の治水、神農氏の医療・農業開発の第一歩から後追いするのではなく、既存の文明としてのその成果を学習するのが、最も賢明な方策であったと言える。

ここに、決定的の違いが生ずる。大陸の人々は自ら創造した文明を誇り、これこそ文明であると考える。外から見ると「中華思想」となる。それを放棄するあるいは曲げるのは自己否定となるので、絶対に放棄せず曲げない、譲らない。強き創造者的態度である。それに対し、大和は、多くの外来文明を自己薬籠中の物にしたとはいえ、その文化は学習を土台としている。よりよいと見られるものに遭遇すれば、その新しきものを学習し、以前に学習したものを捨てるあるいはそれに変化を加えるのに躊躇は少ない。良き学習者と言えよう。外部に規範を求める性向とも言える。後述するが、現代の「グローバル化」に対する態度の違いに、この相違点が顕著に見られる。

2．タイムスパン

漢文明は、5千年前に中原で創造を開始したものを現代にかけて保持している文明である。

論語は、ＢＣ５５１からＢＣ４７９に生きた人の言行録である。それが漢武帝（ＢＣ１５６～８７）のころ、第一の社会的規範とされ、今に続いているのである。２千年前と同じように漢の人々は今でも日常的に「子曰くーーー」と幼少時から諳んじる。

漢字を用いる。20世紀になり簡体字を創造した。簡体字はいかにも旧字を否定したがように、日本人は捉えるが、それは康熙字典を基礎にして作られたものである。康熙帝の時代は、現在の日本人的感覚だと歴史上の事象、大学生の大半が「康熙帝」その名を知らなくてもおかしくないとなるが、漢人にとっては現代に密接につながる時代である。

炎帝という神話上の半神半人の存在、黄帝という神話上の帝王がいる。その陵を共産主義を標榜する現政権が整備し、現在につながる話として扱う。漢民族とは何かという時、「黄帝の子孫」と自任する人々と言ってもよい。中国大陸の漢人、台湾の人々、シンガポールの華人、世界各地の華僑のほとんど全員が「黄帝の子孫か」と問われれば、そうであると答えるであろう。中華文明の一員という意味である。

そのような背景下、いきおい何事を視るにも考えるにも、経緯を手繰り、源流に遡って視、考えることになる。少なくとも百年単位で語り、千年単位で思考する。私の経験である。１９７４年に日本の文部事務次官と北京大学を訪問した。次官が周培源学長（当時）に北京大学の由来はと訊ねた。結果、１時間のレクチャーを聴くことになった。春秋戦国に始まり、晋に繋がり、清まで続いた「国子監」を語り、清末の京師学堂を経てやっと北京大学に辿り着いたのである。その後、間もなく北京大学百周年記念が執り行われた。聞くところによると、その際、北京大学の歴史を２千年とするか百年とするかあるいは人民共和国発足後の北京大学をとらえて50年とするかと真剣に議論が交わされたそうである。

このような漢文明的感覚である。わずか１００年足らず前の１９３７年の盧溝橋事件、まだ当事者が生きている70年前の１９４５年の日本降伏、すべて現在の事柄というのが漢の感覚である。

戦前の日本人は、昭和15年に皇紀二千六百年を祝い、約１３００年前に編纂された古事記、日本書紀を読み、万葉を吟味し、外来文明を摂取咀嚼した論語や漢詩を暗記した。伝統を尊ぶ日本人がいた。旧制高校卒の人々にとって、西欧教養と同時に、和歌を嗜み、孔子孟子を諳んじ、それらを自己の規範形成の糧とし、日々の行動へ反映させていた。

しかし、現在の日本人は、「10年ひと昔」の感覚が強い。大学で授業をする際、「皇紀」も「康熙」も知らないことを前提として話をしなければならない。若者に昭和１６年１２月８日と聞いても、クラスの大半は知らないのが現実である。国運を左右した昭和１２年７月７日を盧溝橋事件発生の日となると知る大学生なお少ないことが多い。これらはもう昔のことで、歴史の授業は縄文弥生などに時間が割かれ過ぎ、現代まで及ばないから、習っていないと言う・「昭和10年代この時期は、先生はすでに生まれていて、歴史ではなく現在のことだ」と言うと、怪訝な顔をする。留学生のいるクラスだと、留学生の方から笑いが生ずる。軽蔑とまではいかないが、このような現代の重要事を知らない、これが日本の知識階層かという笑いである。

この戦後の日本人の短視的、少し前の経緯さえも考えないタイムスパンの短さについては、考え直す必要があろう。百年前は歴史ではなく、父母の日常時であった、父母のことは自分のことという感覚を取り戻すことが必要ではないか。

3. 領域・規模の違い

日本では「日本では」と同じような感覚で「中国では」と一言に言う。広大な大陸である。南北は黒竜江から海南島、気候も天然自然も異なる。東西は東シナ海からチベット高原である。沿岸地域と内陸部は全く異なる天地である。

中国に旅行をするときの準備は、行き先によって異なる。海南島では２月から11月まで海水浴が出来る。軽装の方が良い。水着は持参した方が良い。ハルビンの２月11月は零下である。厚いオーバーが必須である。海南島とハルビンが「遠い」とすれば、北京と上海は「近い」となる。東シナ海沿岸地区の人々にとって海

洋は日常的なものである。山西省、甘粛省、新疆省の人は海を知らない。中国大陸で遠いところというのはこのような距離のことをいう。

大きい川というと長江、黄河である。長江の河口の対岸距離は、瀬戸内海の対岸よりはるかに長い。この大きな長江から水が流れ込む鄱陽湖や洞庭湖は大きい湖である。

これらと比較して日本を視てみよう。日本では桜の季節になったという。日本は冬になったという。北海道の人が鹿児島の人に手紙を書くのに、冬に「厳寒の折」とか書いてもそれほど奇異ではない。北海道と鹿児島の距離は、実際には桜の満開でいうと1月くらいの差はあり、冬の到来も北海道と鹿児島では相当違うが、大体同じである。日本列島は東西に相当に長いが、中国大陸に比べれば、小さいというべきであろう。一言に「日本では」と言ってもよい。

ハルビンと海南島が「遠い」なら、津軽と薩摩は近い。北京・上海の距離と東京・大阪の距離を比較してみるのも良い。「遠い」「近い」の感覚が日中では異なる。

鄱陽湖は大きい湖である。日本では琵琶湖を大きい湖という。鄱陽湖は琵琶湖の4倍くらいの規模である。琵琶湖には色々な魚類が生息し、漁業も行われているが、イルカのような大きい魚類はいない。鄱陽湖には揚子江イルカが生息している。規模が違う。中国人から見ると琵琶湖はかわいらしい規模の湖となろう。長江が大きい長い川なら利根川は小さい短い川となろう。

このような規模の大きい大天地を行動範囲としてきた漢民族である。人による創造物も勢い大きくなる。特に建造物において顕著である。2千余年前に建造された万里の長城は、今でも巨大な建造物である。長らく帝王の拠点であった紫禁城は大きい。皇居や京都御所も小さくはないが、故宮見学に行くとその規模に辟易する日本人は多い。

「大きい」「小さい」は、単純に「大」は「大きい」「小」は「小さい」と訳すと齟齬をきたす。「多少」についても同様である。はてしなく広がる黄河流域の平原から収穫される小麦、長江流域の肥沃の大地から収穫される米をはじめとする農産物の量を考えてみよう。大陸で「沢山」というのは日本ではとてつもなく「大量」であり、日本の大量は大陸的感覚でいうと、多くの場合「少し」となる。

4. 包含する文化

このように広い領域に住む人々である。漢文明により統括されるが、その中に包含する文化は限りなく多様性を帯びる。日本を一つの単位とし、それと同じように中国を考え、中国を一つの単位として、日本と中国を比較するのは適切ではない。日本も子細に見れば多様性を持つが、概説する時「日本ではーーー」と言っても、それほど不当ではないが、極言すれば、「中国ではーーー」とは言えないのである。

まず言葉についてみてみよう。「日本人は日本語を話す」と言っても、間違いではない。ところが、「中国人は中国語を話す」と言えるか。「言えない」が答えである。「中国語」の定義にもよる。そもそも「中国語」を一つの言語の種類の呼称として用いているのは、日本においてだけである。東京外国語大学などで「中国語」と称している言葉は、中華人民共和国政府は、「普通語」と名付け、中華民国時代は「国語」と称し、シンガポールでは「華語」と称している言語である。清朝時代は「北京官話」と言われ、英語では少し前までは「Ｍａｎｄａｒｉｎ」と言われてきた。「中国語」を中国で使われている言葉とすると、日本で言う「中国語は」中国語の一つである。それは北京を中心として使われている「北方語」を基礎に標準化した言語である。そうしてその「北方語」は、漢族共有の母語ではないのである。漢族の言語は、大きく分けて5つある。5大言語圏である。華北の「北方語」、歴史で習う呉越同舟の呉越地域の「呉語」、下って福建省から台湾、シンガポールの多くの華人の日常語である「福建語（閩語）」、香港を含む広東の人々が使う「広東語（粤語）」がある。それに南北朝時代など動乱期に華北から南下し、主に広東省の山地などに住みついた集団の使う「客家語」がある。現在中国ではそれを「方言」と言うが、実際にはそれぞれ独立した言語と把握する方が妥当である。言語学者によると北方語と福建語の距離は、英語とドイツ語の距離よりはるかに遠いと

いう。お互いに全く通じない。総称として「漢語」と言うことが多い。すべて中国の人々、漢族の母語であるから、もし日本人が「中国語」と呼んでいる言葉のみを漢族の言葉としたら、誤認も甚だしい。

それが分からないと、例えば、中華人民共和国が「普通語」を普及させ、今では大体中国各地で、「普通語」を用いて用が果たせる状況にしたというのが、どれだけ漢民族の歴史上大きな仕事だったか理解できないであろう。革命で著名な人物、孫文、毛沢東、鄧小平の父母が一堂に会したとしよう。漢族の間で、あまねく通ずる話し言葉は成立していなかった時代である。意思の疎通は出来なかった。日本人はよく「でも字は同じでしょう」と言う。福建語は、話し言葉の中に対応する漢字が不明なものが非常に多い。話し言葉であり、書き下せないのである。知識階層であれば、書き言葉「漢文」を教養として身に着けていた。異なる語圏の知識階級は、漢文で筆談は出来たであろう。この漢文を用いれば、日本人もベトナム人も朝鮮人も筆談で完璧に意思疎通できたのである。しかし話し言葉は別である。

これを知らないと、平安の日本人が漢字を学び仮名を考案し、漢語と全く別系統の日本語を書けるものとしたことの意義の大きさを理解できないであろう。

漢人は、広大な天地に分かれて住み、言葉も違う。当然、生活習慣も異なる。「南船北馬」ということわざがある。歴史的に、華北の主たる交通手段は馬であり、江南、華南は河川であった。これが分からないと、最近の映画「レッドクリッフ」で、華北軍、曹操が敗北した理由が分からないであろう。

多くの日本人は、餃子、包子を中国食と思い込んでいる。台湾の一般の人々がこれらを食するようになったのは、戦後国民党が持ち込んだ食習慣である。歴史的に華北は麺食であり、江南、華南は米食である。これはついこの間まで保持されてきた習慣である。今でも、漢人仲間の雑談で、「お宅はいつごろかお米のご飯を食べるようになったのか」と聞きあったりする。

挿話一つ。昭和54年春に長春に日本留学の為の予備校を設置した。全国から100人の17歳、18歳の高卒段階の青年を集め、1年の予備教育を行うことにした。その年の秋に、日本の文部次官が訪問した。北京から教育部の局長が同道。その局長が、学生一同に、「半年経って何か不自由はないか」と訊ねたところ、半数が手を挙げ、「ご飯が食べたい」と言った。昭和54年の時点でまだ東北の長春では米食が浸透していなく、毎日が饅頭（まんとう）である。南からの学生には、馴染めない食習慣であった。局長の返事が面白い。あと半年我慢し、来年日本に行けば毎日米食ですよと。

日本では中国茶の代表をウーロン茶と思っている人が多くいる。北京で「お茶」と注文すると、出てくるのは緑茶か花茶である。烏龍茶がほしいときは、特定して「烏龍茶」と言わねばならない。緑茶が無料でも大概、烏龍茶は有料である。反対に福建省の廈門で「お茶」と言うと出てくるのは、烏龍茶であり、花茶が欲しいときは特定し「花茶」と言わねばならぬ。

纏足は中国史上、見逃せない風習である。ところが同じ漢人でも客家には、その風習はなかった。

宗教も、各地各様である。福建、台湾を中心に媽祖信仰という信仰がある。海洋の女神である。船には媽祖像を祭っている。横浜、長崎の中華街にも、媽祖廟がある。しかし、一歩内陸に入ると、湖南省、湖北省、四川省、雲南省などでは、その名さえも知る人はほとんどいない。福建、広東でも、客家は媽祖を拝まない。

このような多様な文化の比較をすると、限りなく紙面を必要とする。上記で、中国とは一言で言えないほど、多様な要素を包含していることが分かろう。

それに比して日本をみてみよう。終戦までは、日本のことを「大八洲」とも言っていた。古事記に出てくる日本の版図である。この中では、人々は皆、同じ言葉を用いてきた。津軽と薩摩では通じないくらい違うと言われるが、れっきとした同一言語、日本語であり、その距離は方言関係にしか過ぎない。福建語と北方語の関係のように、逐語訳が難しいというほど津軽と薩摩では離れていない。福建語（閩語）の中の、閩南語と閩北語との関係が方言関係であ

る。明治維新に当たって、全国内の人々が意思疎通できるようになるのにはそう時間はかからなかった。辛亥革命時の中国ではそうはいかなかった。琉球語は相当に分岐しているが、言語学的には日本語である。

生活習慣も、細部にわたって言うと日本も多種多様であるが、大まかに視るときは、「日本では」と言っても間違いないことがほとんどである。古代から江戸時代まで、全国に道が通じ、飛脚が走っていた。「南船北馬」のような違いはない。お茶は12世紀初頭に中国から入ってきたものであるが、日本で「お茶」というと、緑茶である。ほうじ茶があるが、一地方でほうじ茶が主で緑茶が従、他の地方では緑茶が主でほうじ茶が従というような、違いはない。

歴史的に細かく言うと、農民はなかなか「白い飯」は食せなかったというようなことはあるが、日本人は稲作民族であり、米飯が主食であると言っても良いであろう。日本人は、皆、味噌汁が好きで、梅ぼしを好むと言ってもよいであろう。

信仰も大体同じ性向を持っている。神仏混淆が長く続き、寛容である。「仏教」と言ってみたり、「神道」と言ってみたりする。ほとんどの日本人がそうである。クリスチャンは、100万人を超えたことがない。特に明治維新以降は、標準語化は進み、服装もほぼ全国を通して均一化し、食生活も基本的には同一的になっている。

このように「日本では」あるいは「日本人は」というような感覚で、上記の多様性を持った中国世界を論ずると、正鵠を射ることが出来ない。

5．台湾の言語生活の特色

漢文明と日本文化のこのように異なる二つの社会が真正面から遭遇した場合、何が生ずるか。台湾を例にみてみよう。1895年から1945年まで台湾は大日本帝国領であった。1985年には約250万人の漢人がいた。1945年には約400万の漢人と40万人の内地人（日本人）がいた。この50年間にこの両者の間でどのような文化的反応が起こったか、言語生活を通してみてみよう。

少し前まで、多くの台湾人が日本語を普通に使っていた。世界中で日本以外の地で日本語が通用する土地である。今でも80歳以上の台湾人は、日本語を話し、書き、読む。若い日本人には、これがなぜか、なかなか理解できないようである。

また一般的にも、なぜ日本語が台湾に浸透したのか理解されていないことが多い。よく聞かれるのが、皇民化運動による、日本文化の強制の結果であるという見方である。しかし、異なる文明の遭遇という視点から見ると様相は全く異なる。

1895年の段階の台湾の漢人の言語生活はどのような様相であったのかから考える必要がある。それにはこの漢人たちが台湾に定住するようになった経緯を知らねばならない。多くは福建省からの移民である。広東省から移住した客家が15パーセントくらいである。大体は大陸の故郷の貧困を避けての移民である。明朝も清朝も、「海禁」を策としていたから、実際には経済難民である。

福建系で見てみよう。話し言葉は、福建省内の各自の出身地の言葉である。泉州、漳州、厦門、福州さまざまである。厦門語は閩南語であり福州語は閩北語でお互いに言語学上は福建語であることは間違いないが全く通じない。客家語はなおのこと「外国語」である。

福建語は、すでに述べたように話し言葉は、漢字だけでは書けない言語である。表音文字を考案していないから、要するに文盲である。台湾に渡った後、財をなし地主などになった階層はどうであったかというと、書き言葉として漢文を使っていたのである。台湾の漢人の間に、共通の標準化された話し言葉はなく、大半は文盲と言う状態であった。政府の統治形態はというと、清朝の役人は、北京官話という土地の人々には全く通じない言葉を使い、文書は漢文と言う状態である。漢文明の辺境の地、大多数の住民が文明の基礎である書き言葉を持たない状態であった。

漢文では、西欧文明を咀嚼しきれないという点も見逃せない。台北の欧米との貿易などで成功した商人もいた。またクリスチャンもいた。彼らは漢文、英語、それに教会ローマ字と言う表音文字を用いたりしていた。

総括的に見ると、台湾は漢文明の辺境であり、書き言葉がない福建語と客家語が日常語であり、移住の経

緯からして中原文明に対するコミットが希薄である状態にあったといえる。

そこに、1895年に西欧文明に接して近代国家建設を目指す日本が到来したのである。日本を通して西欧的近代国家、社会を目にした。清朝の腐敗しきった官僚政治に代わって、賄賂は禁物、法治を基本とする社会に触れたのである。日本は、何よりもまず教育と公衆衛生に力を注いだ。学校で仮名の50文字を覚えれば、基本的に書くことが出来るようになる。大多数の台湾の民衆にとって、初めて読み書きができる状況に身を置くことになったのである。文盲の農民にとって、漢文を学ぶのと仮名を覚えるのとどちらが早いか。日本語の普及は、目を見張るほど速かった。表音文字を持つ日本語の強みを見逃してはいけない。同時にそれが西欧文明の担い手ということもあって、知識層にとっても近代社会へのパスポートとしての役割を果たしたのである。

新聞には漢文の紙面が昭和10年前後まであった。しかしそのころには大半の台湾人にとっては日本語の方が実社会の生活に役立つ自分の言葉となっていた。漢文面は姿を消し、日本語が完全に台湾人の読み書きの手段となったのである。このような背景を知らずに、植民地支配による文化の強制などというのは、当を得ているであろうか。

大陸の中心部になると様相が異なる。「中原」に入ると異民族は漢語を常用するようになり漢文明にどうかされる。清朝、満州族のケースが好例である。台湾は辺疆の例である。

6. 西欧文明との関係

台湾のケースで、日本語の方が福建語より西欧文明の摂取に適していると述べた。また台湾は辺境であるが故、他の文明の摂取に抵抗が少ないとも述べた。

ここで、西欧文明に対する日本と中国の対応の違いに目を向けよう。漢文明は5千年の歴史を誇る。どれほどの人間がこの創造に関わってきたか。その積み重ねは重い。また自信は深く、その文明を尊崇する気持ちは強い。

1793年の時点で乾隆帝はイギリスに対し、中華は「地大物博（土地は広く物産は豊である）」と述べている。わずか200余年前のことである。これは故宮博物館に行き、歴代皇帝所有の宝物を見ると、その背景が分かる。清朝どころか、明朝、宋朝を遡り、唐の時代にすでに絢爛たる文明を誇っていたことが、その美術の結実の高度さから窺える。現在の日本でも書道愛好家に神技に近い模範とされている王羲之、顔真卿は両者とも唐代の人である。宋の白磁などは、博物館に入っていなければオークションで億単位で取引されるほどである。亡国の皇帝宋の徽宗（1082～1135年）の「桃鳩図」は日本にあり、日本の国宝とされている。

このような高度な芸術を支えるのには、強力な経済、産業、政治がなければならない。中華の皇帝はその創造者の代表であり、所有者である。中華以外を夷狄と見るのも不思議ではない。1793年にイギリス使節マカートニーに対し、1813年にはアマーストに対し、三跪九叩頭の礼を要求している。それに応じなかったため、貿易は拒否された。

その後、アヘン戦争で西欧の実力を見せつけられ、「半植民地」と孫文が嘆いたような状態に陥る。しかし100年を経て1949年中華人民共和国の成立を見たときには、外国軍隊は大陸から姿を消していた。5000年の歴史のうち、この「半植民地」の状態は、わずか100年である。この経験が基本的中華の姿勢を変えたかどうかは、よくよく考察しなければならない事柄である。見方によっては、中華文明の力に対する自信を強めることになったとも言える。わずか100年で、その夷狄の侵略を跳ね返したという経験になる。

総じて見ると、西欧文明を否定はしないが、中華文明を世に冠たるものとする態度は変わっていないと言えよう。

「グローバル化時代」という視点に対する反応にそれが顕著に表れている。孔子学院事業の展開である。世界中に中国語を普及させ、中華文明に対する理解を広めようという壮大なる事業である。グローバル化時代だから、西欧文明を自らのものにしようという動きと正反対である。

翻って日本を見てみよう。1842年に中華大帝国が欧米に敗

退するのを見た。アヘン戦争である。日本は、この清朝の敗退を知ると、いち早く舵を切り替え、1867年には維新を決行し、「文明開化」を標榜する。この「文明」とは、従来多々学んできた漢文明ではなく、西欧文明である。榎本武揚などが「万国公法」と称し、その学習、遵守を旨とした国際法の「万国」や「国際」とは西欧世界のことである。

それまで2千年の長きにわたって学習してきた「聖賢の国」の漢文明は、「脱亜入欧」あるいは維新の時の御誓文にある「旧来の陋習を破り、天地の公道に基づくべし」から読み取られるように、マイナスイメージを伴うことになる。

「和魂洋才」という動きもあるが、維新後の日本の動きは、西欧からの学習に大きく傾く。近代学校制度を整備する。「近代」というが、要は西欧風学校制度である。東京帝国大学が創立される。重要な学部法学部に設けられたのは「独法、英法、仏法」コースである。医学部に漢方医は一人も入っていない。完全に西欧医学の学習を旨としている。東京音楽学校が設けられた。そこで学ぶのはピアノ、ヴァイオリン、フルートなどである。小学校が全国津々浦々に設置される。明治の早い時期にそこでは「ドレミファーーー」を教え、「1寸、2尺、3丈」の変わりに「1センチ、2メートル、3キロ」と学ぶ。アメリカ大統領ジョージ・ワシントンやエジソンが学習の対象として取り上げられる。高等学校では、ドイツ語、フランス語、英語を必死に学ぶ。西欧科学技術を学んで、大日本帝国を築くのであるが、大戦に突入し敗戦。占領下に陥る。その後は、チョコレート、チューインガムに始まり、ペニシリン、ナイロンとアメリカ文明に圧倒される。

そうして最近の「グローバル化時代」の到来である。それに対応するため、最も重要な施策の一つが英語の小学校よりの学習促進となる。中国の「中国語普及のための孔子学院設立」と際立った違いである。グローバル化時代だから、全世界の人々よ、日本語を学ぼうではないかと呼びかける発想は全く生じない。

漢文明の規範を規範とする中国と、西欧文明を世界文明とし普遍的規範とする日本の違いを、強く意識すべきである。

7. 古典の共有

しかし、いかに小学校から英語を学んだからといって、日本人が西欧人と全く同じくなることはないであろう。英語で話していても発想法は違う。この発想法まで欧米式にすると考えているわけではあるまい。一部企業では、社内用語を英語とし始めているものもあるようだが、日本人同士が日常生活で英語を共通語として使おうという発想をする者は、社会全体からみればごく少数と言っても差支えない。やはり大多数の日本人は、自分らは日本語を常用するのが当然であり、日本の伝統は捨て去ってよいものではないと考えているのではないか。

歴史を見ると、欧米傾斜がちょっと過度であると感じられるようになると、必ずといってよいほど揺れ戻しがある。その場合、よく言われるのが「アジア回帰」である。日本は「アジアの一員」であるとか、日本は西欧とアジアの懸け橋となるという発想である。

「アジアの一員」について考えてみよう。何が共有の物かである。アジアをどの範囲としてとらえるかという問題がある。東アジアと東南アジアに限ってみてみよう。近代の欧米文明摂取以前、この地域では漢文が共通の書き言葉であったことがあげられる。中国、朝鮮半島、日本、ベトナムの知識人はみな漢文を当たり前に読み書きに用いていた。朝貢貿易であるが、タイや琉球王朝と中国王朝との外交文書も漢文である。

そうして知識階層は徹底的に中国古典を真学んだのである。日本では、明治維新の文明開化以降も漢文を学習している。旧制中学、旧制高校以上に学んだ人が今なお生存している。この人たちの多くは論語を暗記し、漢詩を諳んじている。

また習俗なども中国に生じたものが、広くこの範囲に伝播し、それぞれの文化の一部となっている。端午の節句、七夕祭り、お彼岸など現代でも日本人が自分のものとして行っている行事だが、これらは起源は中国である。

食ももとをただせば大陸からというものが大半である。稲作は太古の話しであるが、大陸から伝来したこ

とは周知のことである。お茶は12世紀初の伝来である。隠元豆は、その名も中国僧の名である。箸は東アジア共通のもの。

少し前までは、東アジアは一つの文明共同体であった。満州族は中原に入り統治者となったが、250余年を経て、辛亥革命により清王朝が倒された時点で、満州語を使える者はほとんどいなくなっていた。ほとんど漢文明に同化されていた。ただし、朝鮮半島と日本では、固有の言語を保持し、一種のバイリンガルの生活をしていたといえる。併呑されずにきた。

特に日本は、漢文の古典の解釈にも独自性を発揮し、また和文により翻案し消化し尽している。書においても、和風化している。絵画も中国職を色濃く残しているが、日本画は中国画から独立していると言えよう。

この源流は同じであるが、各国がその文明を独自に発展させ、現時点では異なった文化的様相を示しているのが、アジアの諸国間の関係である。これが時には強い親近感を生み出し、時には近親憎悪的な反発を招く。また理解しているつもりが、本当は完全に誤解していることもままある。

日本について考えると、漢文明を貪欲に学び、摂取したが、鯨呑されなかったのは、漢文明に接する前の日本の特質が、一見柔らかく弱いように見えながら、その柔軟性ゆえに強く、独自性を保ちえたのであろう。

その独自性が、顕著に見えるのが社会のあり方である。次にそれを考察してみよう。

8. 社会の異質性

漢文を共有してきたと述べた。その中心である儒学は朝鮮半島、日本でも社会規範の骨子をなしてきたと一般的には言われる。教育勅語の「よく忠によく孝に」は、典型的な儒学的道徳規範とおもわれている。

しかし、この点にこそ大きな違いがみられる。忠の対象、孝の実践においてである。日本では「忠」というと、まずは主君に対する関係を指す。しかし多くの漢人は、「為人謀而不忠乎」という論語の言葉を第一に想起する。忠の対象は「人」なのである。実践的段階では、友人に対して心からそのためを考えて、助力助言をしているかということになる。

これは別の表現をすれば、コミットの対象の違いともいえる。日本では、国家、会社に忠誠を誓うことが極めて重要視されてきた。中国では「人」である。その「人」の基本は自己に発して親子兄弟、それが拡張して家、そうして郷土の「人」、友人となるのである。

漢人にとって、国家や会社は忠誠の対象としてはあまりにも抽象的である。歴史上、多くの忠臣の事績が賞賛され、語られる。一見日本と同じである。しかし、仔細に見ると、漢人の場合、それは中国という国家ではなく、まずは漢王朝、宋王朝、明王朝という王朝になる。例えば忠臣の好例である岳飛は宋王朝の忠臣であるが、対峙していた金王朝にとっては、賊酋となる。諸葛孔明は蜀の忠臣ではあるが、魏や呉にとっては討伐すべき厄介な反対派である。

さらに留意すべきは、王朝に対する忠誠でもなく、それはその直接接している個人が忠の対象である。諸葛孔明は劉備に対しての忠である。さかのぼって漢の時代の例である。蘇武が西域で艱難辛苦を耐え、漢王朝に対する忠を全うした。しかし、これも仔細にみると漢王朝に対する忠誠ではなく、その任務を与えた漢の武帝に対する忠誠心である。

戦前の小学校唱歌に「田道間守」というのがあったのを覚えておられる方もおられると思う。田道間守は渡来人である。垂仁天皇に仕え、その命により「ときじくのかぐのこのみ」を求めに行く。日本に帰って来た時には、垂仁天皇は崩御なされていた。唱歌は「おわさぬ君の御陵に、泣いて帰らぬ田道間守ーーー」と続く。これは中国的説話である。垂仁天皇への忠誠であり、抽象的な天皇への忠誠ではない。渡来人の話として、極めてエキゾチックである。乃木大将の殉死も、衝撃的である。これも抽象的日本という国あるいは天皇という存在に対してより明治天皇への忠誠が強く出ている。日本にもこのような例はあるが、どちらかというと稀である。

反対に藩に対する献身、国家のための献身の例は枚挙に堪えない。藩を守るために藩主の交代を図るとか養嗣子を求める。これらは一見儒教的行動であるが、漢人にはなじめない発想である。関羽や張飛は、劉備

のために尽くす。孔明は劉備に頼まれたからその遺児の面倒を見る。これが漢人の感覚である。劉備の遺児は無能である。蜀を盛り立てるためには、有能な人を探してきた方が合理的である。しかし漢人にとっては、それでは尽力の意味がなくなる。あくまでも劉備あってこその蜀漢である。

ことに日本の歴史上の現象、後継藩主に養嗣子を求めるというのは、漢人には理解しがたい社会的運びである。徳川家斉の子供が多くの藩に後継者として送り込まれた。日本の家老や武士たちにとってはそれにより藩の存続を保つ方策であり、むしろ賢明な選択とさえも捉えられる。漢人からすれば、家老たちが乗っ取りにくみした、その藩は滅亡したという図式になる。

現代社会の組織、会社についてもこの感覚の違いが顕著に表れる。日本人にとっては抽象的な○○会社の発展が重視される。漢人の場合は、自分を採用してくれた○○社長あるいは○○部長の命運のほうが重要である。この感覚の違いが分からないと、中国での企業活動が円滑に成功させることは難しい。

この「忠」に対する感覚の違いは、「孝」に対する感覚の違いからきているともいえる。漢人にとって、親とは生みの親以外にはない。孝の対象は生みの親である。家族とは血統を共にする人々である。養子をすることはほとんどない。そうして、この親子関係を中心とした家こそが、人間のよって立つべき基礎である。その拡張としての公司である。儒教の影響の強い韓国の大企業がほとんど同族会社であると日本人は不思議がるが、儒学の孝を額面通り受け入れている韓国社会では、これがむしろあるべき姿となる。事業を起こし、他人にそれを任せたり渡したりするのは不孝であるという感覚であるといえよう。

血縁を基礎にする家族が自分の生活の中心である。したがって日本人がもつ「公」という感覚も伝統的にはないといってよい。孫文がそれを憂いて「天下為公」をスローガンにした。それは漢人には「為公」の感覚がないことより来ている。漢人が、あるいは漢文明のなかで、物事を判断する基準は、自己との具体的血統的関係をもつ家族といってよい。抽象的に○○主義とか○○組織ではないことを理解する必要がある。日本の現代中国理解はこの点、見当違いであるともいえる。中国は共産主義国家であるとか、共産党指導の国家であると議論するよりも、実態を把握すべきである。西欧の社会科学の真似ごとではなく、自分の目で見、自分の分析による理解を追求すべきである。

反対に中国は例えば最近の動きでは「安倍はけしからん」として首脳会談をしない。日本人にとってば「内閣総理大臣」のほうが「安倍」より大事なのである。なぜ日本の総理大臣と会わないのかという感覚と、なぜ安倍に会わなくてはならないのかという感覚の違いである。

安保反対、自衛隊違憲を強く主張する社会党の村山が、総理になった途端、安保も自衛隊も容認する。日本では、総理になったらそうするほかないだろうと当たり前のこととする。漢人にとっては、自分の主張を通すために総理になるのであって、総理になったら自己の主張を変えるのは本末転倒で全く理解できない動きである。遺族会の支持を得て総理になった途端、それまでと違って靖国神社参拝をしないとした橋本総理の動きも、中国人から見れば理解しがたいことになる。しかし、最近では日本のこのような行動パターンについても研究しているようである。

日中の関係の難しさはこのような社会的行動の規範の違い、当否の感覚の違いからくる。漢人は文明の創造者としての態度で、自分が正しいと思うことを声高に主張する。日本は、いろいろな考え方があるとして控えめに振る舞う。お互いに相手の動きが理解できなくなる。

文化が異なる二つの集団がぶっつかる場合、やはり声高に主張し、説明し、理解を求めるほかないだろう。「以心伝心」あるいは控えめの美徳では交渉は成立しない。

9. いくつかの現在の問題

現在いくつかの問題が、日中関係の円滑な運びの障害になっている。これらの問題も上に述べた日漢の違いを念頭に見れば、その理由が理解しやすくなる。

尖閣列島である。日本は1895年に国際法に則り、きちんとした手

続きを踏んで日本領であることを世界に向かって宣言し、それが認められたとする。中国は歴史的に中国領であるとする。この違いは現在の中国政府が日本でいう国際法を全世界に普遍的なものとしてとらえるか否かの問題である。中国にすればそれは「国際法」と日本はいうが、「西欧法」にしか過ぎないではないかということになり、伝統的な中華帝国の発想に則る。天命を受けた天子が中華の版図内と認めればそれは中国領であるということになる。西欧に淵源を持つ現代の国際法を共有の規範とするか、東アジアでは伝統的漢文明の規範を規範とするかの問題である。違う土俵で議論していれば、議論はすれ違うばかりである。どちらを土俵とするかが問題である。

歴史認識の問題が、常に中国側から提示される。これはタイムスパンの問題に深くかかわる。1930年代のことは、漢人の感覚ではコンテンポラリーのことであり、人々は文明に則りその当否を議論し正しい認識を持つべきであると考える。日本は「もう昔のこと」となる。大半の日本人は、その時期に何が起こったかに関心もないし、知識もない。当否を論ずる前に知らないのである。かみ合わない。

また中国は重要な市場とし、ビジネスの展開を図ろうとするが、円滑にいかないことが多い。これは上記の、コミットの対象の違いを認識すれば、日本流ではうまくいかないと感ずることが中国流では当たり前になることが多くある。日本の規範を共有の物と考えるところから生ずる齟齬であり、どちらの社会的規範を規範とするかということから始めれば、解決する事柄である。

このような中、日本はグローバル化時代だといい、外国人の受け入れを推進している。日本在住の中国人の数が、かつて見ないほど多くなっている。社会的に著しい進出を示している。日本をよしとして、在住を決めるのであろう。しかし身に着けている基本的な社会的規範は安全に同化するのは容易くない。ボットムアップの関係者が相談して物事を決める日本的規範は、なかなか身につかない。トップダウン的やり方をする。良し悪しの問題ではなく、違いである。摩擦が生ずる。日本的規範を保持しようとするならば、この違いを認識し、受け入れに際し何に留意しなければならないかを考える必要がある。

10. 今後の問題

日中の問題とされている問題も、西欧文明と伝統的中華文明のあり方の相克と把握すれば、理解がしやすくなる事柄が多い。中国は、五千年の歴史伝統を誇る。西欧に起源を持つ規範を世界全体の普遍的規範とはしない。

日本は幕末、明治維新期以来、「文明開化」で西欧的規範を普遍的規範としてきている。それを世界唯一の規範とし、中国人もそのように考えていると考える。西欧文明を信奉しない、西欧文明と異なる文明があるという認識を日本は持たねばならない。その上で西欧文明とどう対峙するか、伝統的漢文明をどう理解するかを熟慮すべきであろう。

日本の伝統をこの両大文明の狭間にあって、如何に保持するか改変を加えるかを考えるのが、今の日本にとっての最重要課題であろう。

※右記の文章は九月七日の講演に光田講師が加筆されたものです。

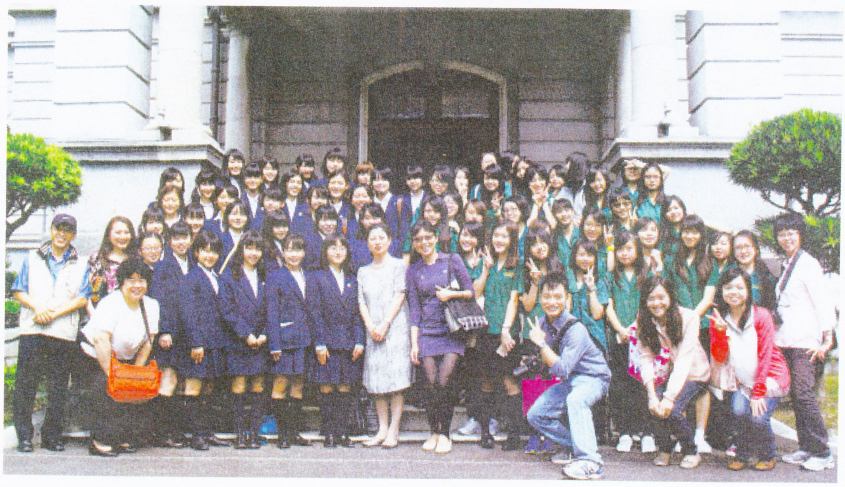
光田明正氏　プロフィル

1936年　台北に生まれる
1959年　東京大学経済学部卒業
1960年　文部省入省
1962年　カナダ・マニトーバ大学留学
1973年　OECD日本政府代表部一等書記官
1977～81年　文部省留学生課長
1987年　大臣官房審議官（学術国際担当）
1992年　桜美林大学教授
2001年　長崎外国語大学・長崎外国語短期大学学長に就任
2005年　桜美林大學孔子学院学院長に就任
2011年　桜美林大学孔子学院名誉学院長に就任

著書　①中華の発想と日本人（1993講談社）、②「国際化」とは何か（1998玉川大学出版部）

2006年春　瑞宝中綬章を受章

お茶の水女子大附属高校と台北市立第一女子高級中学の交流協定締結



本協会が橋渡した学校交流は昨年に引き続き十月二十二日から三泊四日で台湾研修旅行が実施されて台北市立第一女子高級中学（北一女）と交流が行われた。両校は交流協定を結んだ。今年は去年よりショートステイが時間を多くとり充実して行われた。

本協会は実施前の九月二十六日お茶の水女子大附属高の菊池美千世副校長を訪ね祝意を表した。そして生徒へ台湾の理解を深める一助に書籍　緒方秀樹著「台湾の礎を築いた日本人たち」および古川勝三著「若者に知ってほしい台湾の歴史」の三セットを寄贈した。

また同校に台北市立第一女子中に寄贈したのと同様に交流記念に桜を植樹する提案をした。

学校から協議して実現を図るとの意向が示された。植樹適期の来年二月を予定している。

交流が成功裡に終わって間もなくお茶の水女子大附属高菊池美千世副校長から理事長および加藤理事あてに書簡がよせられた。

「日増しに秋も深まってまいりました。皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます

さて、数年来、台北市立第一女子高級中学校とのご縁をとり持っていただき、また昨年の訪台に際しましては、多大なご援助を賜り厚く御礼申し上げます。

さる十月二十二日から二十五日まで台北研修を実施し、二十九名の生徒と三名の引率教員、無事に帰国いたしました。今回は文部科学省の予算を使っての訪問ということで、台北市で活躍する女性起業家のお話を伺ったり、北一女でも事前にテーマを決めて英語で討論したりと、研修活動を充実させてまいりました。

北一女においては、数年来の課題でありました交流協定を締結し、協定書の交換をしてまいりましたのも、ひとえにベーシックライフインフォメーション協会のご援助があってのことと、深く感謝申し上げます。協定書のコピーを同封させていただきますのでご覧ください。

協定締結を契機に今後の交流をさらに深めてまいりたいと願っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます」

協会は書簡を受けお茶の水女子大附属高の暖かい評価に感謝している。

アニメーション映画「パッテンライ」（八田が来る）上映会開催

台湾の中部の不毛の大地を豊かな農耕地によみがえる烏山頭ダムを造った若き日本人土木技術者八田與一。それを描いたアニメーション映画「パッテンライ」の上映会を実施した。

著作権者虫プロダクション伊藤叡社長の厚意による。

上映会は、さる六月七日練馬区立サンライフ練馬で開き、入場者は少なかったが老若男女の鑑賞者は見入っていた。

■構成員

特定非営利活動法人
ベーシックライフインフォメーション協会

理事長　田代　實範
副理事長　浅田　豊
理事　加藤美智子
理事　寺田　勇
理事　堀江　利彰
監事　荻原　淑江
監事　岡村　悦子　鳥羽　展維
郭　純　林　銀
山脇阿佐子　鄞　芳薫
池ヶ谷潤子　林　芳子
林　彦宏

❖編集後記❖

△有志のご寄付で会報第8号が発行できた。ご支援に感謝します。

△練馬区報に講演会の案内を掲載したところ反響があって区民の参加者が七割あり、うれしいことであった。今後力を入れていきたい。

△本会の活動案内は随時ホームページでお知らせしている。ご覧願います。

特定非営利活動法人
ベーシックライフ
インフォメーション協会
会報第8号
発効日　平成二十六年十二月一日
発行所　東京都練馬区石神井町
六―十二―三
発行人　田代　實範